

夫の知らない顔——家庭的な人妻は、年下トレーナーの前でだけ女に戻る

単身赴任で空いた心の隙間。誠実な年下に惹かれて揺れる、背徳純愛。

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

近所の誰もが、浅倉香澄^{あさくら かすみ}を「きちんとした奥さん」だと言う。

いつも身ぎれいで、物腰がやわらかく、家のことを完璧にこなす、隙のない人妻。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

カーテンを引いた部屋には、ベッドサイドの小さな間接照明だけが点っていた。窓の外を、遅い時間のタクシーのライトが一度だけ流れて、消える。アパートの廊下にも、もう人の足音はない。この一室で何が起きているか、知る者は誰もいない。

昼間の香澄を思い浮かべる。スーパーのレジ袋を提げて坂を上り、隣家の老婦人に丁寧に頭を下げ、誰に対しても穏やかで、控えめで、非の打ちどころのない女性。「浅倉さんの奥さんは本当にちゃんとしてる」と、街の誰もが口を揃える、あの慎ましい横顔。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、とろけるように呼んでいる。

「……悠真くん」

二人ぶんの体温だけが満ちた狭いベッドの上で、香澄がこちらを見上げた。いつも結んでいる栗色の髪はほどけ、白い首筋に幾筋も乱れて貼りついている。垂れ気味の目もとは潤みきって、昼間の慎ましさはどこにもない。左手の薬指で、指輪だけが、間接照明の光をかすかに弾いていた。

たちばな ゆうま
立花悠真は知っている。この人の、表の顔と、裏の顔を。家庭的で完璧な「奥さん」が、自分の前でだけ、こんなふうに女に戻ってしまうことを。



——ここから先は製品版でお楽しみください——